

理性的魂の準備は能動知性からの 作用を必然化するのか

——イブン・シーナーの知性認識理解が含む一問題——

沼田 敦

はじめに

本論の主張は、イブン・シーナー (Ibn Sinā, ca. 980-1037) における理性的魂 (nafs nātiqa) の準備 (isti'dād)¹⁾ は、知性認識を必然的に生ぜしめる、ということである。イブン・シーナーにおける理性的魂の準備は知性認識を必然的に生ぜしめるのか否か、という問題は、研究史上²⁾、未だ議論されていないように思われる。がこの問題は、イブン・シーナーの知性認識論に対する理解を深めてゆく上で、必ず議論の対象となると思われるので、あえて本論の主題として選んだ次第である。

問題提起

まずなぜこの問題が生じるのかを確認しておきたい。イブン・シーナーによると、人間の魂は次のような過程をへて現実に知性認識するに至ると思われる³⁾。

まず理性的魂の中の知性的能力が、表象力の中の諸表象像を吟味する (ittala')⁴⁾。次いで離在知性である能動知性 ('aql fa'āl) の光が、その諸表象像を照明する。するとそれによって、理性的魂の内に、非質料的形相の流入への準備が生じる。その準備により、その形相が能動知性から理性的魂に流入し、理性的魂が現実に知性認識するものとなる。(以上要約終り。)

さて、この要約によると理性的魂が現実に知性認識するに至るのは理性的魂の中に生じる準備によってであるとされている。しかし準備というものは、その準備によって意図されている物事を必然的に生ぜしめるものであるとはいえないのではないだろうか。ここから、イブン・シーナーにおける理性的魂の準備は必然的には知性認識を生ぜしめないのではないか、という疑問が生じてくるのである。(ただし本論が扱うのは、あくまで準備が必然的に知性認識を生ぜしめるのか否か、であって、何がこ

の準備を作り出すのか、に関しては、基本的に問題としない。）

本論の構成

先の疑問に対して、本論は、イブン・シーナーにおける理性的魂の準備は、知性認識を必然的に生ぜしめる、と主張する。その理由は以下の論証によって示される。

前提(1) 何らかの「つながり (nisba)」が、作用因と受容因の間の作用・受動を必然的に生ぜしめる。

前提(2) 受容因の側の準備は、このつながりである。

結論(1) 受容因の側の準備は、作用因と受容因の間の作用・受動を必然的に生ぜしめる。

主張(1) 知性認識における作用因は、能動知性である。

主張(2) 知性認識における受容因は、理性的魂である。

結論(1)、主張(1)、(2)より、

理性的魂の側の準備は、能動知性と理性的魂の間の作用・受動を必然的に生ぜしめる。

(ちなみに以上の命題は全て、論者がイブン・シーナーの主張として抽出したものである。イブン・シーナー自身の言葉ではない。)

以下各節では、上の前提、主張を一つ一つ、イブン・シーナー自身の主張として妥当かどうか検証し、最終的な結論がイブン・シーナー自身の主張としても妥当であることを立証してゆきたい。

前提(1)「何らかのつながりが、作用因と受容因の間の作用、受動を必然的に生ぜしめる」の検証。

この前提の検証は、比較的容易であると思われる。ほぼ同じ主張をイブン・シーナー自身が述べているからである。

作用因と受容因が存在しており、両者の間に作用・受動が存在しない場合、作用・受動を必然的に生ぜしめる何らかのつながりが生じる必要がある⁹⁾。

この主張を具体例によって説明すると以下のようになるだろう。現実燃えている火とまだ火を灯されていないランプがあるとす。このランプに火が灯されるためには、その火とランプとの接触という両者間の作用・受動を必然的に生ぜしめるつながりが必要である。以上で前提(1)は検証されたものとする。

前提(2)「受容因の側の準備は、このつながりである」の検証

先の引用部直後でイブン・シーナーは、そのつながりたりうるものを列挙している。その一つに、受容因の側の準備が含まれている。よって、「受容因の側の準備は、このつながりである」との主張に問題はないだろう。イブン・シーナーの発言は次のようになっている。()内の文は論者の補いである。

(その何らかのつながりたりえるものは)作用因の側からは、作用を必然的に生ぜしめる意志 (irāda), ないしは作用を必然化する本性 (ta bi'a), ないしは道具, ないしは時間といったものである。

受容因の側からは、存在してはいなかった準備といったものである。

双方の側からは、一方の他方への到着 (wuṣūl) といったものである⁶⁾。

ただし、ここでイブン・シーナーが語っているのは一般論であって、知性認識の場合のみについて語っているのではない。またイブン・シーナーは、これら三つの側すべてのつながりが生じなければ、作用・受動が生じないと言ってはならず、そのうちの一つでも十分作用・受動を生ぜしめると言っているのである。以上で前提(2)は検証されたものとする。

主張(1)「知性認識における作用因は、能動知性である」の検証

まずイブン・シーナーによる作用因の定義を確認したい。次いで知性認識における能動知性の役割を確認し、そこから主張(1)の妥当性を検証したい。

イブン・シーナーは作用因を「自分自身からは離れている存在を与える原因」⁷⁾と定義している。ここで「離れている」と表現されている作用因とその結果の関係は、正確には、次のような関係にある。まず結果の存在は、本質的な形で作用因の内に存在する可能性をもたない。観点をかえて言うと、作用因は第一義的にはその結果の存在

の基体ではない。これは、結果の存在は付帯的な形でなら作用因の内に存在する可能性をもつ、作用因は第二義的にでならその結果の基体たりえる、ということである。

イブン・シーナーがこのような複雑な条件を付けた理由は、次のような場合が念頭に置かれていたからだと思われる。その場合とは、木の本性という作用因が同じ木の質料の内に運動を生み出すような場合である（成長など）。この場合、生み出された運動は木の質料の内にある。しかし木の質料は、木の本性によって存在させられているので、生み出された運動は、付帯的には木の本性のうちにあると言えるのである。以上で作用因の定義の内容の確認をおえる。

次いで、知性認識における能動知性の役割を確認したい。この点は「問題提起」の箇所ですでに簡単に言及された。ここではより正確な記述をこころみたい。

能動知性の認識における役割のみを簡潔に述べている所は発見できなかった。そこでまず、知性認識における能動知性の必要性が説かれる論証を示す。そしてそこから、間接的に必要な情報を引き出すことにしたい。その議論は次のとおりである⁹⁾。（以下要約）

事物は、その事物に作用を与えるものによるのでなければ、可能態から理実態へ引き出されない。理性的魂も事物である。従って理性的魂も、理性的魂へ作用を与えるものによってのみ、可能態から現実態へ引き出される。さて、知性認識することとは、理性的魂が知性的形相という作用を受けることである。理性的魂へ知性的形相を与えるものは、知性的形相を与えるものなのであるから当然、知性自身であることになる。この知性自身であるものが、能動知性である。（要約おわり）

従って理性的魂は、理性的魂へ知性的形相を与える能動知性によってのみ、現実態において知性認識するものになるのである。

再度確認すると、以上の論証の結論から、知性認識における能動知性の役割は、理性的魂へ知性的形相を与えることであると言ってよいだろう。

主張(1)の検証にうつりたい。作用因は、自身から離れている存在を与えるものである。理性的魂の中の知性的形相は、能動知性からは離れているものである。従って、知性認識における作用因は能動知性である。以上で主張(1)は検証されたものとする。

主張(2)「知性認識による受容因は理性的魂である」の検証

イブン・シーナーによる受容因の定義は「(結果である)ものの部分ではない、す

なわち（結果の）部分である要素とは別のものである、受けとる基体」⁹⁾である。説明すると次のようになる。受容因は、質料因であるその結果の部分である要素ではなく、その結果を受けとる基体である。先の火とランプの例では、ランプが受容因に、ランプに移された火の質料が、質料因にあたる。

すると問題は、知性認識において知性的形相を受けとるものは何か、を明らかにすることになる。実はこの問題の答えはすでに明らかにされている。

先に理性的魂は、理性的魂に知性的形相を与える能動知性によってのみ、現実態において知性認識するものとなることが明らかにされた。そこでは、知性的形相を受けとるものが、理性的魂であるとされているのである。従って、知性認識における受容因は理性的魂であると言って問題ないだろう。

また、理性的魂が知性的形相を受けとるものであることは、次の言葉からも察せられる。

従って、知性的能力が表象力の中の個別的なものどもを吟味し、先に言及された我々の内の能動知性の光が、それら個別的なものどもを照明すると、それらが質料と質料的なものどもから切り離されたものに変化し、理性的魂の内に刻みこまれるのである¹⁰⁾。

「刻みこまれること」と「受けとること」は異なるではないか、と反論されるかもしれない。だが刻みこまれてはいるが、受けとられてはいないものは存在しないだろう。

また主張(2)に対して、次のように反論されるかもしれない。知性認識における受容因は、理性的魂ではない。その内の能力である理論的知性（*‘aql nazari*）である。理論的知性は、「質料から切り離された普遍的形相を刻みこまれる本性をもつもの」¹¹⁾なのだから。

この反論には次のように答えたい。受容因は、その定義により、結果の基体である。従って、もし理論的知性が知性的形相の受容因であるならば、理論的知性は知性的形相の基体であることになる。ところで基体とは、「自分自身、すなわちその種（*naw‘i ya*）によって存在するもの」¹²⁾である。一方、理論的知性は、自分自身では存在しえない偶有である。ゆえに、理論的知性は基体ではない。従って受容因ではない。ただ

し、知性的形相が理論的知性の内にあることは否定されない。これは偶有の中に偶有が存在するという形においてである。

以上で、主張(2)は検証されたものとする。そして本論の主張「理性的魂の準備は、能動知性と理性的魂の間の作用・受動（知性認識）を必然的に生ぜしめる」も立証されたものとする。

おわりに

本論の主張をまとめると次のようになる。受容因の側の準備は、作用因と受容因の間の作用・受動を必然的に生ぜしめる。知性認識における作用因は、能動知性である。知性認識における受容因は、理性的魂である。従って、理性的魂の側の準備は、能動知性と理性的魂の間の作用・受動を必然的に生ぜしめる。

註

- 1) Goichon, A.-M., *Lexique de la langue philosophique d'Ibn Sinā*, Paris, Desclée de Brouwer, 1938, p. 211 によると、この語は、*préparation, aptitude, se dit dans l'ordre matériel et dans l'ordre intellectuel* とのみ説明されている。語の意味そのものを定義している箇所はのせられていない。筆者自身もまだ発見できていない。
- 2) イブン・シーナーの知性認識に関しては次のものを参照。Davidson, Herbert A. *Alfarabi, Avicenna, & Averroes, on Intellect*, Oxford, Oxford University Press, 1992. Lee, Patrick, "Aquinas and Avicenna on agent intellect" in *The Thomist*, 45, 1981, pp. 41-61.
- 3) *al-Shifā': al-nafs*, edition supervised by I. Madkūr, al-Qāhira, 1975, pp. 208-209.
- 4) この「吟味」については、cf. Ibn Sinā, *al-ishārāt wa al-tanbihāt*, al-qism al-thānī, ed. S. Dunyā, al-Qāhira, 1957 p. 378. 「吟味する」という訳語は、本来普遍的なものを対象とする知性の、個別的なものどもと関わるその関わり方をあらわすために選ばれた。
- 5) *al-Shifā': al-ilāhiyāt*, edition supervised by I. Madkūr, al-Qāhira, 1960, p. 375, ll. 14-15.
- 6) *op. cit.* p. 375, ll. 16-p. 376 l. 2.
- 7) *op. cit.* p. 275, ll. 10-11. なおイブン・シーナーの作用因の西洋哲学史上の意義については、Gilson, Étienne, *Études Médiévales*, Paris, Vrin, 1983, pp. 167-191.

- 8) *al-Najāt*, ed. by M. Fakhri, Beirut, Dār al-ufāq al-jadida, 1985, p. 231.
- 9) *al-Shifāʾ: al-ilāhiyāt*, p. 258, ll. 9-10,
- 10) *op. cit.: al-nafs*, p-208, ll. 9-11.
- 11) *op. cit.* p. 39 ll. 1-2.
- 12) *op. cit.: al-ilāhiyāt* p. 59, ll. 1-3.

[転写] (IPA《国際音声字母》とは異なるもの) (t) 歯茎無声閉鎖軟口蓋化音, (s) 歯茎無声摩擦軟口蓋化音, (ʒ) 歯茎有声摩擦軟口蓋化音, (ʕ) 咽頭有声摩擦音, (ʕ) 声門閉鎖音.